

〔原 著〕

社会的地位による幼児の仲間に対する応答スキルの差異

—エントリー及びホスト場面からの検討—

筑波大学心理学系：姜 信善

The role of response and feedback skills in relation to children's social status
and communication skills: An examination of entry-host context

Sin Sun Kang

問 題

子どもの仲間関係の問題と介入的観点に基づいた研究の中で、最近では子どもの仲間関係の成立と発展に影響する要因に関する研究が多く行われるようになった。そのような研究のタイプの一つとして子どもの仲間関係そのものを検討し、仲間との相互作用において用いる社会的スキルと子どもの行動特徴や社会的地位との関係を明らかにしようとするものがあげられる。そのようなタイプの研究のアプローチの仕方には二通りある。第一のアプローチは、仲間との不適応問題をもつ子どもを対象にした社会的スキルの獲得や訓練に関するもの（Mize & Ladd, 1990）である。すなわち、仲間との円滑な相互作用ができない子どもを対象にし、仲間との相互作用の仕方を援助するものである。一方、第2のアプローチは健常児を対象にし、子どもの社会的・認知的特徴と社会的地位との関連を検討することである（Dodge, 1986; Hazen & Black, 1989; Black & Hazen, 1990）。訓練研究のような事例的研究の場合、訓練対象となる社会的不適応児がどのようなスキルの欠如を示すかによって、社会的スキル訓練の内容や手続きは異なる。それ故、仲間から拒否されたり（Rejected group, 以下R児群と略する）、無視されたりする子ども（Neglected group, 以下N児群と略する）が、普段の仲間との相互作用においてどのようなスキルに特に乏しいのかについて体系的な知見を提出できるとは言い難い。

この点に関して、スキル訓練研究とは異なり、Hazen ら（Hazen & Black, 1989; Black & Hazen, 1990）は、社会的地位によるコミュニケーション・スキルを明らかにすることを目的とした一連の研究を行っている。そこでは、幼稚園のクラス内の幼児について、ソシオメトリーで測定される社会的地位ごとに普段の仲間とのやりとりの特徴を、仲間入りにおける入る場面（エントリー）と受け入れる場面（ホスト）という場面の違いなどに注目し検討している。さらに、Kemple, Speranza & Hazen (1992) は、縦断的研究を行うことによって、コミュニケーション・スキルと社会的地位との関連についてより明らかにしている。すなわち、入園1年目に、仲間からの働きかけに対して適切に答えたり、ポジティブに受け入れたりするスキルは入園2年目の社会的地位に影響を及ぼし、仲間からの受容度を高めた。また入園1年目の社会的地位は入園2年目のコミュニケーション・スキルを予測することができたという。このように、コミュニケーション・スキルの質によって、子どもの社会的地位が維持あるいは強化されるとならば、現時点での仲間関係において明確な不適応を示さない場合でも、不適切なコミュニケーション・スキルを持ち続けることが将来の仲間関係における不適応を導く可能性があることが推察される。従って、子どもの各社会的地位と関連したコミュニケーション・スキルの特徴を明らかにすることは、不適応を導く可能性に関して予防的な意義をもつと考えられる。

方 法

そこで姜 (1998) は, Hazen ら (Hazen & Black, 1989; Black & Hazen, 1990) におけるような実験観察の手法を用いて, 先行研究で検討されていない以下の2点について明らかにすべく, 観察カテゴリーを設定した。

第1に, Black & Hazen らの研究 (Black & Hazen, 1990; Hazen & Black, 1989) では, コミュニケーション・スキルを働きかけスキルと応答スキルに大別して検討しているが, このうち, 応答スキルに関しては不明確な点が残されている。すなわち, 相手からの働きかけ方の違いによる応答の分類がなされていず, 要求や質問など明確に返答が求められるような働きかけをされた場合の応答と, 情報の提供や意見の表明など返答がなくても不自然でない働きかけをされた場合の応答とを区別していない。そこで姜 (1998) は, この2つは応答しない場合の不自然さが異なるので区別すべきであると指摘し, 前者の応答を“反応”, 後者の応答を“フィードバック”として区別して検討している。

第2に, コミュニケーションの手段が言語であるか行動(非言語)であるかについて, 社会的不適応児は言語的相互作用が少ないことが指摘されているが, 実際にそれらの子どもの相互作用がどれくらい言語的であるかに関してはあまり検討されてこなかった。そこで, 姜 (1998) は応答がどの程度言語的になされているのか, 非言語的になされているのかについて明らかにするために, 働きかけに対する応答が言語でなされるか行動のみでなされるかを調べた。

ところが, 姜 (1998) では, 子どもの社会的地位に関連したコミュニケーション・スキルを検討することにおいてエントリー場面だけに注目している。仲間入りがどのくらい上手にできるかということも子どもの社会的地位の重要な要因であるが, 新しく入ってきた仲間と上手にやっていくかどうかということは遊びの展開過程において特に重要であると思われる。そこで本研究では, 姜 (1998) で設定された応答カテゴリーを用い, 場面(エントリー対ホスト)に注目し, 幼児の場面による応答スキルと社会的地位との関連について検討することを目的とする。

被験児 茨城県T市のS幼稚園の年中児53名を対象とした。彼らの平均年齢と年齢範囲は5歳1.7ヶ月(4歳9ヶ月～5歳10ヶ月)であった。
実施時期 写真ソシオメトリックテストは1995年10月中旬に実施され, 子ども同士のコミュニケーション場面の観察は1995年12月～1996年3月にかけて実施された。

材料 個別写真カード: ソシオメトリック指名法で用いる各幼児のカラー写真(縦4.5cm×横4.5cm)を5cm×5cmの白色厚紙上に貼り付けた個別写真カードが作成された。

手続 (1)写真ソシオメトリック指名法: 各被験児と同じクラスの同性の仲間全員の写真カードを机上に配列し, そのカードを指さしながら仲間の名前を確認させた。被験児を除いた残りのカードを示し, 「幼稚園で遊ぶ時1番(2, 3番目に)遊びたい子はだれですか」と質問し, 肯定的指名を行わせた。被験児が指さしたカードはその都度裏返し, 残りのカードの中から2番目, 3番目に遊びたい人を選ばせていった。次に, 同様の手順で「幼稚園で遊ぶ時1番(2, 3番目に)遊びたくない子は誰ですか。当てはまる子がいたら教えて下さい。当てはまる子がいなかったら答えなくてもいいです」という教示を与え, 否定的指名を行わせた。被験児に対する教育的配慮として, 否定的指名を尋ねた後に「なぜ一緒に遊びたくないのか」, 「どうすれば楽しく一緒に遊べるのか」について被験児と十分に話し合った。

(2)相互作用場面の観察: 実験者はまず, 3人の子どもを社会的遊びを引き出すようなおもちゃ(ままごとセット, プラレール, ミニカー, ブロック)を準備した部屋の前につれていき, 自由に遊んでよいことを伝えた。2人の子どもが先に部屋に入り, 遊ぶよう言われ, 10分後に残りの一人がその部屋に入室した。相互作用場面は, 8mmビデオカメラに全部で20分間録画された。分析に用いられたのは3人目の子どもが入室してから10分間であった。全ての子どもは必ずエントリー1回, ホスト2回～3回を経験

することになるが、順序効果を考慮してホストの分析は1回目をういた。社会的地位の組合せについてはカウンターバランスされた。なお、3人の組み合わせについては同じクラスの、1) 同性のグループであること、2) 3人の子どもはお互いに肯定的指名や否定的指名で選ばれた仲間ではないこと、3) 一度行った組合せは二度と用いないことの3つの基準が用いられた。

得点化の方法

(1) ソシオメトリック指名法の得点及び社会的地位群の分類

被験児ごとに仲間から受けた肯定的指名数と否定的指名数をそれぞれ集計した。それぞれの合計指名数を本人を除くクラスの同性仲間数で除算し、仲間一人当たりの指名数を産出した。各クラスごとの男児全体または女児全体の平均値とSDに基づいて標準得点(平均=0, SD=1)に変換した。2つの標準得点(肯定的指名得点=L得点, 否定的指名得点=D得点)から、社会的好み得点(Social Preference, 以下SP得点と略する, $SP=L-D$)と社会的影響力得点(Social Impact, 以下SI得点と略する, $SI=L+D$)を産出した。L得点, D得点, SP得点, SI得点に基づいてCoie & Dodge(1988)の分類方法によって、人気児群(Popular group, 以下P児群と略する), R児群, N児群, 平均児群(Average group, 以下A児群と略する), 両論児群(Controversial group, 以下C児群と略する)の5つの社会的地位の群分けを行った。Table 1に示した通り、全被験児はいずれかの

地位に分類された。

(2) 応答カテゴリーの分類及び得点化

①カテゴリーの設定 姜(1998)のカテゴリーに従い、応答カテゴリーは大きく、返答(反応)と、フィードバックに分けられた。それぞれのカテゴリーは言語的か行動的かによって分類され、内容に応じて下位カテゴリーに分類された。言語的返答の下位カテゴリーは相手からの要求に対する“受諾”, “拒否”と、質問に対する“適切な回答”である。行動的な返答は相手からの“要求”に対する“受諾”と“拒否”に分類された。フィードバックについては、言語的、行動的フィードバックそれぞれについて相手からの働きかけが自分に向けられた場合か、不特定に向けられた場合かによって分類した。Table 2に応答カテゴリーを示した。

②コーディング 録画されたコミュニケーションの単位化及びカテゴライズは全て2人の実験者と訓練を受けた学部学生の協議により行われた。言語的コミュニケーションは2人の対象児のいずれかの発話かとぎれた時点を区切りとし、Table 2のカテゴリーにカウントした。その際、一連の発話が内容的に複数のカテゴリーに分類できる場合は、それぞれのカテゴリーにカウントした。行動的コミュニケーションは、行動による一連のコミュニケーションの開始及び終了時点を同定し、それぞれTable 2のカテゴリーにカウントした。なお、コーディングの信頼性を検討するために、コーディングを行った実験者とは別の2名の評定者によって独立に全被験児の約30%に当たる16名に対して評定を行ったところ、カテゴリーごとのコーディング

Table 1 各社会的地位群の分類基準と人数内訳

地位群	分類基準	男	女	計
P児群(Popular group, 人気児群)	$SP>1$, $L>0$, $D<0$	8	9	17
R児群(Rejected group, 拒否児群)	$SP<-1$, $L<0$, $D>0$	6	3	9
A児群(Average group, 平均児群)	$-1<SP<1$, $-1<SI<1$	6	2	8
N児群(Neglected group, 無視児群)	$SI<-1$, $L<0$, $D<0$	4	6	10
C児群(Controversial group, 両論児群)	$SI>1$, $L>0$, $D>0$	4	5	9
	計	28	25	53

Table 2 応答カテゴリー

カテゴリー		定義と例
返答	言語的	<p>受諾 単純な受諾 発展的な受諾</p> <p>拒否 単純な拒否 代替案を提示した拒否 適切な回答</p>
	行動的	相手の要求, 命令に対して単純に受け入れること (「うん, やる」など)
		相手からの要求された提案などに広がりを与える受け入れ方 (「おままとすると?」という質問に対して「うん, 私は赤ちゃんね」のように答えること)
		相手の要求, 提案, 命令に対して単純に拒否すること (「ここ丸くしてくれる?」という質問に対して「いや, ダメ」のように答えること)
		相手の要求, 命令に対する理由, 対案, 妥協案を提示することによって拒否すること (「おままとしようという提案に対して「ゲームしよう。ゲームの方が面白いから」)
応答	言語的	相手からの質問に対して適切に答えること (「赤いミニニカはだれのもの?」という質問に対して「私のもの」というふうに答えること)
		相手から要求, 提案されたことに対して行動で受け入れること (「ここ, 丸くしてくれる?」という要求に対して言葉での返事はないが頼まれたようにすること)
		相手からの提案, 要求, 命令されたことに対して別の行動をすることによって拒否を示すこと
		自分に向けられた相手からの働きかけに対して言語的フィードバックを与えること (「ここはよくできてるね○○ちゃん」という相手からの働きかけに対して「そうね」というふうに言語的フィードバックを与えること)
	行動的	自分に向けられた働きかけでなくても相手の働きかけに対してフィードバックを与えること (「なんで走らないのかな」という相手の働きかけに対して「なんだろうね」というふうに言語的フィードバックを与えること)
フィードバック	言語的	自分に向けられた相手からの働きかけに対して行動的フィードバックを与えること (例えば, 笑ったり, 頷いたりすること)
		自分に向けられた働きかけでなくても相手の働きかけに対して行動的フィードバックを与えること (例えば, 頷いたり, 笑ったりすること)

の一致率は、返答79.0%,フィードバック80.7%であり、全体では80.3%であった。

③カテゴリーの得点化 返答については他児からの働きかけ（要求、質問）に応答した頻度、フィードバックについては働きかけ（意見や情報の提供）に応答した頻度を求め、その手段としての言語・行動それぞれの占める比率をカテゴリー毎の言語・行動得点とした（Table 3-1）。返答の下位カテゴリーについては、他児から“要求”を受けた回数に占める受諾・拒否の比率をそれぞれ求めた。さらに受諾・拒否それぞれについて手段・内容に関する下位カテゴリー得点を、それぞれの頻度が上位カテゴリーに占める比率によって算出した。“質問への適切な回答”のカテゴリー得点は、言語的返答を必要とするような働きかけ（“情報の要求”，“意見の要求”）を受けた頻度を分母とし、適切に回答した比率によって算出した（Table 3-2）。フィードバックの下位カテゴリーについては、働きかけに対してフィードバックを与えた比率、その中で自分への働きかけに対してフィードバックを与えた比率、不特定への働きかけに対してフィードバックを与えた比率を求め、それぞれのカテゴリー得点とした。さらにそれぞれのフィードバックについて、フィードバックが行われた頻度に占める言語・行動の比率を算出し、各手段のカテゴリー得点とした（Table 3-3）。以上の全てのカテゴリー得点は角変換され、分析された。

結 果

返答、フィードバックの各下位カテゴリー得点が社会的地位及び場面とどのように関連しているかを検討するために、社会的地位（被験者間要因）と場面（被験者内要因）を独立変数、コミュニケーション・カテゴリー得点を従属変数とする分散分析を行った。社会的地位の主効果が有意である場合、下位検定として LSD 法による多重比較を行った⁹⁾。社会的地位、エントリー・ホスト別の応答カテゴリー得点の平均と SD は Table 3-1, 2, 3 に示した。

1. 幼児の社会的地位と返答との関係

Table 3-1 に示したように返答の場合、言語的返答率、行動的返答率のいずれにおいても社会的地位と場面の交互作用が有意傾向になった（順に、 $F(4,39)=2.43, p<.10$ ； $F(4,39)=2.53, p<.10$ ）。下位検定の結果、R 児群はエントリー場面において C 児群より言語的返答が多く（ $Mse=357.04, 5\%$ 水準）、ホスト場面においては R 児群は、C 児群より行動的返答がより多い傾向にあった（ $Mse=360.41, 5\%$ 水準）。Table 3-2 に示したように、受諾の下位カテゴリーについてみると、“単純な受諾”では場面の主効果が有意であり（ $F(1,35)=4.83, p<.05$ ），エントリー場面よりホスト場面でより多かった。“行動的受諾”については場面の主効果が有意傾向となり（ $F(1,34)=3.67, p<.10$ ），ホスト場面よりエントリー場面でより多い傾向にあった。拒否の下位カテゴリーに関してみると、“単純な拒否”の場合は、社会的地位と場面の交互作用が有意であり、“行動的拒否”については社会的地位と場面の交互作用が有意傾向であった（順に、 $F(4,30)=2.95, p<.05$ ； $F(4,30)=2.64, p<.10$ ）。下位検定の結果、まず、“単純な拒否”の場合、N 児群はホスト場面よりエントリー場面でより多く、逆に、C 児群はエントリー場面よりホスト場面でより多かった。次に、“行動的拒否”については、N 児群はエントリー場面よりホスト場面でより多く、一方、C 児群はホスト場面よりエントリー場面でより多い傾向にあった。

“代替案を提示した拒否”、“要求への受諾”、“質問への適切な回答”においては有意差は示されなかった。

2. 幼児の社会的地位とフィードバックとの関係

Table 3-1 に示したように、フィードバック全体の言語率、行動率においては有意差は示されなかった。

フィードバックの下位カテゴリーに関する平均と SD は Table 3-3 に示した。フィードバックの全体量である“フィードバック全体”については、社会的地位と場面の交互作用が有意であった（ $F(4,40)=5.02, p<.01$ ）。下位検定の結果、エントリー場面においては P, N 児群は R,

Table 3-1 社会的地位・場面ごとのコミュニケーション手段得点の角変換後の平均とSD 及び分散分析の結果

返答の手段	言語	P児群(N=17) ¹⁾						主効果 (F値)	交互作用 (F値)	下位検定
		M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)			
フィードバック の手段	エントリー	41.15(20.60)	46.89(24.70)	47.67(27.31)	55.44(18.01)	33.75(19.49)	n.s.	F(4,39)=2.43 + 正 ⁶⁾	(R>C)	
	ホスト	50.08(19.87)	39.10(16.10)	48.33(21.63)	47.61(17.64)	60.75(20.07)	n.s.	F(4,39)=2.53 + 正 ⁷⁾	(R>C)	
	エントリー	60.19(20.85)	54.15(53.92)	53.92(26.98)	45.00(17.39)	67.00(20.23)	n.s.			
	ホスト	50.54(20.07)	61.35(16.73)	52.00(20.57)	53.00(17.68)	39.75(19.46)	n.s.			
フィードバック の手段	エントリー	57.82(25.77)	70.01(16.81)	57.90(27.61)	52.62(17.67)	59.43(14.80)	n.s.	n.s.		
	ホスト	61.11(14.22)	55.57(23.81)	61.08(19.38)	64.46(11.37)	65.25(16.27)	n.s.	n.s.		
	エントリー	33.26(25.98)	23.16(15.89)	33.50(27.59)	37.69(17.07)	31.13(13.66)	n.s.			
	ホスト	29.32(13.49)	38.01(23.09)	29.85(18.07)	25.85(10.80)	25.31(15.50)	n.s.			
1) 人気児群 2) 拒否児群 3) 平均児群 4) 無視児群 5) 面論児群										
6) エントリー - 7) ホスト + p<.10										

Table 3-2 社会的地位・場面ごとの返答下位カテゴリー得点の角変換後の平均とSD及び分散分析の結果

要求への受諾													
受諾の手段	言語	P児群(N=17) ¹⁾	R児群(N=9) ²⁾	A児群(N=8) ³⁾	N児群(N=10) ⁴⁾	C児群(N=9) ⁵⁾	主効果 (F値)	交互作用 (F値)	下位検定				
										M(SD)	M(SD)	M(SD)	M(SD)
受諾の手段	単純な受諾	エントリ－	58.54(13.02)	58.80(21.70)	50.27(24.32)	51.87(24.22)	55.82(16.84)	n.s.	n.s.	n.s.			
		ホスト	56.12(12.74)	49.32(17.92)	42.40(8.41)	44.78(19.90)	57.44(18.07)						
		エントリ－	25.19(16.53)	25.27(19.59)	28.02(21.50)	35.09(14.38)	29.70(29.94)	F(1.35)=4.83*					
	発展的な受諾	ホスト	37.44(15.97)	26.08(20.86)	46.62(34.78)	48.28(20.58)	36.54(25.43)						
		エントリ－	12.62(7.03)	11.04(5.82)	9.10(0.00)	14.31(10.01)	9.10(0.00)						
		ホスト	9.64(1.95)	9.10(0.00)	9.10(0.00)	11.59(6.60)	9.10(0.00)						
拒否の手段	行動	エントリ－	62.82(18.84)	61.23(19.45)	63.11(22.75)	50.25(8.73)	62.17(30.12)	F(1.34)=3.67*	n.s.	エ>ホ			
		ホスト	52.39(16.24)	63.20(22.68)	45.07(34.06)	40.32(18.01)	54.40(25.04)						
		エントリ－	20.49(23.32)	25.88(21.18)	38.75(28.63)	37.00(22.77)	13.46(8.73)	n.s.	F(4.30)=2.95*				
	単純な拒否	ホスト	31.00(29.34)	33.55(19.17)	24.28(20.83)	17.28(10.65)	43.26(30.93)						
		エントリ－	25.66(24.14)	24.89(29.19)	14.83(12.82)	25.52(16.32)	14.32(10.45)	n.s.	n.s.				
		ホスト	23.96(28.48)	11.81(7.19)	17.33(11.94)	19.42(10.23)	24.42(15.09)						
質問への適切な答え	行動	エントリ－	55.15(28.95)	49.94(34.15)	47.51(26.70)	39.22(23.11)	72.71(12.78)	n.s.	F(4.30)=2.65*	N(ホ>エ) C(エ>ホ)	n.s.		
		ホスト	46.61(32.39)	55.30(22.64)	59.67(23.07)	64.56(15.18)	33.07(28.61)						
		エントリ－	51.85(34.56)	45.47(24.40)	65.09(16.16)	55.20(17.55)	41.87(21.13)	n.s.					
	発展的な拒否	ホスト	52.74(30.55)	63.94(22.32)	68.89(25.68)	63.91(32.49)	65.53(25.35)						
		エントリ－	20.49(23.32)	25.88(21.18)	38.75(28.63)	37.00(22.77)	13.46(8.73)	n.s.	F(4.30)=2.95*	N(エ>ホ) C(ホ>エ)			
		ホスト	31.00(29.34)	33.55(19.17)	24.28(20.83)	17.28(10.65)	43.26(30.93)						

¹⁾ 人気児群 ²⁾ 拒否児群 ³⁾ 平均児群 ⁴⁾ 無視児群 ⁵⁾ 両論児群 ⁶⁾ ホスト ⁷⁾ エントリ－

* p<.10 * p<.05

¹²⁾ 受諾をしなかった場合を拒否としてカウントしたので、要求への拒否得点は記述していない(要求への拒否得点=100-要求への受諾得点)。

こ 中央値以上と未満に分けて²⁾検定を行った結果、度数に有意な偏りは示さなかった。

Table 3-3 社会的地位・場面ごとのフィードバック下位カテゴリー得点の角変換後の平均とSD及び分散分析の結果

フィードバック全体														
		P児群(N=17) ¹⁾		R児群(N=9) ²⁾		A児群(N=8) ³⁾		N児群(N=10) ⁴⁾		C児群(N=9) ⁵⁾		主効果 (F値)	交互作用 (F値)	下位検定
		M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)	M	(SD)			
フィードバックの手段 ^{註)}	言語	エントリー	45.47(17.29)	25.89(13.34)	38.90(8.78)	48.48(13.19)	27.49(11.46)	40.19(13.28)				F(4,40)=5.02 **	エ ⁶⁾ (R,C<P,N) ホ ⁷⁾ (P,R,C>A;P>N) R,C(ホ>エ);N(エ>ホ)	
		ホスト	44.89(8.58)	41.43(11.16)	29.52(5.60)	37.50(11.36)	65.25(16.27)							
	行動	エントリー	57.82(25.77)	70.01(16.81)	57.90(27.61)	52.62(17.67)	59.43(14.80)			n.s.	n.s.	n.s.		
		ホスト	61.11(14.22)	55.57(23.81)	61.08(19.38)	64.46(11.37)	65.25(16.27)							
自分への働きかけに対する フィードバック	言語	エントリー	33.26(25.98)	23.16(15.89)	33.50(27.59)	37.69(17.07)	31.13(13.66)				F(4,40)=2.99 *	エ (N>R,C) ホ (P>A,R,N,C>A) A(エ>ホ); C(ホ>エ) :		
		ホスト	29.32(13.49)	38.01(23.09)	29.85(18.07)	25.85(10.80)	25.31(15.50)							
	行動	エントリー	44.34 (18.80)	29.78 (16.61)	42.39 (11.14)	46.01 (10.36)	28.87 (15.61)			n.s.	n.s.	n.s.		
		ホスト	51.10 (14.67)	39.07 (9.22)	31.69 (11.59)	41.52 (16.16)	49.37 (13.74)							
不特定の働きかけに対する フィードバック	言語	エントリー	61.66(23.03)	67.76(15.97)	53.89(32.20)	57.98(16.99)	68.11(19.03)				F(4,38)=5.27 **	エ (P,N>R,A,C) ホ (R>A)		
		ホスト	68.94(14.19)	66.13(30.96)	71.91(16.34)	62.31(12.68)	68.13(21.02)							
	行動	エントリー	29.51(22.68)	23.44(14.57)	37.80(31.91)	32.65(15.94)	23.30(17.50)			n.s.	n.s.	n.s.		
		ホスト	22.28(12.94)	26.28(30.51)	19.77(14.82)	28.01(12.11)	23.27(19.65)							
フィードバックの手段 ^{註)}	言語	エントリー	48.37 (25.71)	15.26 (11.75)	27.92 (14.96)	49.07 (26.31)	22.61 (11.26)				F(4,38)=2.41 *	R,A(エ>ホ);C(ホ>エ) ホ (C>R,A)		
		ホスト	34.10 (24.57)	41.52 (17.06)	22.69 (7.92)	31.34 (22.00)	26.62 (17.78)							
	行動	エントリー	55.09(30.28)	67.56(27.98)	62.56(22.32)	50.06(33.89)	27.05(25.39)			n.s.	F(4,38)=2.30 *	R,A(ホ>エ);C(エ>ホ) ホ (R,A>C)		
		ホスト	53.66(26.37)	23.64(13.32)	29.78(18.56)	60.00(30.10)	83.71(10.00)							

1) 人気児群 2) 拒否児群 3) 平均児群 4) 無視児群 5) 面談児群
 6) エントリー 7) ホスト 8) p<0.05 9) p<0.01
 10) 手段(言語・行動)の得点は各フィードバックが行われた時の各手段の比率による。

考 察

C児群より多かったが、ホスト場面ではP, R, C児群はA児群より多く、N児群はP児群より少なかった ($Mse=174.49$, 5 %水準)。また、R, C児群はエントリー場面よりホスト場面でより多く、N児群はホスト場面よりエントリー場面でより多かった。このときの手段別フィードバックについては、言語、行動のいずれにおいても有意な結果は示されなかった。働きかけ対象別のフィードバックについてみると、まず“自分への働きかけに対するフィードバック”は社会的地位と場面の交互作用が有意であった ($F(4,40)=2.99$, $p<.05$)。下位検定の結果、エントリー場面においてN児群はR, C児群より多かったが、ホスト場面においてはP児群はA, R, N児群より多く、C児群はA児群より多かった ($Mse=252.76$, 5 %水準)。また、A児群はホスト場面よりエントリー場面でより多く、C児群はエントリー場面よりホスト場面でより多かった ($Mse=168.31$, 5 %水準)。この時の手段別フィードバックについては、有意な結果は示されなかった。次に、“不特定への働きかけに対するフィードバック”については社会的地位と場面の交互作用が有意となり ($F(4,38)=5.27$, $p<.01$)、下位検定の結果、エントリー場面でP, N児群はR, A, C児群より多く、ホスト場面ではR児群はA児群より多かった ($Mse=168.31$, 5 %水準)。このときの手段別フィードバックについては言語的手段得点、行動的手段得点について社会的地位と場面の交互作用がそれぞれ有意傾向であった (順に、 $F(4,38)=2.41$, $p<.10$; $F(4,38)=2.30$, $p<.10$)。下位検定の結果、R, A児群はホスト場面よりエントリー場面で言語的フィードバックがより多く、エントリー場面よりホスト場面で行動的フィードバックがより多かった。一方、C児群はエントリー場面よりホスト場面で言語的フィードバックがより多く、ホスト場面よりエントリー場面で行動的フィードバックがより多かった。また、C児群はホスト場面においてR, A児群より言語的フィードバックがより多かった。

まず、手段の比較と全体の傾向について一通り考察した後、各社会的地位群の特徴について考察する。

1. 手段について

本研究のカテゴリーにおいて、行動による返答は相手の要求に対して黙って受諾したり拒否したりすることである。それゆえ、言語による返答よりも明確に意志が伝わらない場合があり、また、やりとりも発展しにくい。また、言語的フィードバックは相手の働きかけに対して強化を与え遊びを発展させやすいのに対して、行動的フィードバックは笑ったりうなずいたりすることであるため、明確な強化を与えることにならない場合がある。このように、言語による応答と行動のみによる応答では、コミュニケーションにおいて明確性や発展性において異なると考えられる。

Table 3-1に返答、フィードバックのそれぞれの全体手段得点の平均とSDを示した。まず、返答の全体手段についてみると、この年齢の幼児は場面を問わず言語、行動をそれぞれほぼ半々の比率で用いることが示唆された。ところが、R児群とC児群との間には場面によって手段の差が示された。すなわち、R児群はC児群よりエントリー場面で言語的返答がより多く、ホスト場面では行動的返答がより多かった。次に、受諾や拒否においても言語か行動かという極端な手段使用はみられなかった。ただし、受諾の場合、場面の単純主効果が示され、行動的受諾がホスト場面よりエントリー場面でより多かった。拒否の手段においては場面による特徴は示されなかったが、N児群やC児群は場面による差を示していた。すなわち、N児群はエントリー場面よりホスト場面で、C児群はホスト場面よりエントリー場面でそれぞれ行動的受諾がより多かった。次に、フィードバックの手段については、全体として有意ではなかったが、言語率が高いことが示された。働きかけ対象別にみると、不特定への働きかけに対するフィードバックにおいて差が示され、R, A児群はホス

ト場面よりエントリー場面で言語率が高かった。それに対して、C児群はエントリー場面よりホスト場面で言語率がより高く、ホスト場面においてC児群は、R、A児群より言語率が高かった。

以上のように、応答の手段については、ある社会的地位の幼児が常に行動的であるということではなく、場面と応答の文脈によって群の特徴があるといえる。そこで、以下に各社会的地位群の特徴についてまとめよう。

2. 各社会的地位群の特徴について

先行研究 (Hops & Greenwood, 1988) では、社会的不適応を示しやすい社会的地位の低い群 (N児群, R児群) は、社会的地位の高い群 (P児群, A児群, C児群) より応答スキルの欠如を示すことが多いと指摘されている。そこで、本研究では応答スキルの欠如をより分析的に明らかにするために、応答スキルを返答とフィードバックという側面から検討した。その結果、返答の内容においては群間差は示されなく、フィードバックにおいて多くの差が示され、フィードバック・スキルの重要性が示唆された。従って、以下に社会的地位の低い群と高い群のフィードバック・スキルのそれぞれの特徴について考察する。

1) 社会的地位の低い群の特徴

先述のように、社会的不適応を示しやすいN児群やR児群は仲間との相互作用が非言語的である場合が多いことが指摘されている。ところが、本研究ではN児群やR児群はホスト場面において返答の全体の言語率が他の群と差がなく、いくつかのカテゴリーで高い言語率が示された。すなわち、N児群やR児群が全体的に非言語的であるというわけではなく、N児群とR児群は場面によって異なる特徴を示していた。

まず、N児群についてみると、N児群はエントリー場面においてフィードバックの全体量、不特定への働きかけに対するフィードバックについてはP児群とともにR児群より多く、自分への働きかけに対するフィードバックはR、C児群より多かった。すなわち、エントリー場面においてN児群はR児群よりフィードバック・ス

キルが、全体的に豊富であることが示された。一方、R児群はホスト場面ではフィードバックの全体量、不特定への働きかけに対するフィードバックのいずれにおいてもA児群より多かった。また、N児群やR児群は場面の差を示しており、フィードバックの全体量の場合、R児群はホスト場面よりエントリー場面で、N児群はエントリー場面よりホスト場面でより少なかった。このように、R児群はエントリー場面で、N児群はホスト場面でスキル使用の拙さをより多く示していた。N児群やR児群が仲間関係に不適応を示しやすいのは、特定のスキルの絶対的不足というより自分の立場すなわち、場面によるスキルの運用の拙さが原因の1つとして推察される。

2) 社会的地位の高い群の特徴

まず、P児群の他の群と異なる特徴として、P児群は、フィードバック全般において場面を問わず他の群より多かった。すなわち、P児群はフィードバックの全体量がエントリー場面ではR、C児群より多く、ホスト場面ではA、N児群より多かった。その上P児群は、フィードバックの下位カテゴリーのいずれにおいても場面の差を示すことなく、上手に用いていることが見出された。このようなP児群のフィードバック・スキルの豊富さや場面によらない安定した使い方が仲間からの受容度の高い原因として考えられる。

A児群は、自分への働きかけに対するフィードバックや不特定への働きかけに対しての言語的フィードバックはホスト場面よりエントリー場面でより多く、有意ではなかったが、フィードバックの全体量や不特定への働きかけに対するフィードバックにおいてもホスト場面よりエントリー場面でより多かった。これらのことから、エントリー場面においてのフィードバック使用の上手さや言語的手段使用の多さがA児群の特徴として示された。

一方、C児群は、応答スキル全般においてP児群あるいはR児群の特徴を有するという両面性を示した。すなわち、ホスト場面においてはP児群とともにフィードバックの全体量、自分へ

の働きかけに対するフィードバックがA児群より多かった。ところが、C児群はR児群と同様に、フィードバックの下位カテゴリ全てにおいて有意ではなかったが、ホスト場面よりエントリー場面でより少なかった。このように、C児群はフィードバック・スキルの全般においてホスト場面ではP児群と同様のパターンを示したり、エントリー場面ではR児群と同様のパターンを示したりする両面性を示した。C児群のこのような両面性のどちらかが顕著になるかによって、P児群あるいはR児群へと変化する可能性が高いと思われる。このようなC児群の特徴がある仲間からは受容されるが、ある仲間からは拒否される原因として考えられる。

まとめと今後の課題

社会的地位の低い群すなわち、N児群やR児群に全般的に応答スキルが不足しているわけではないことが見い出された。また、それぞれどのような場面において、相対的に応答スキルが不足しているかが明らかになった。先行研究(Hazen & Black, 1989; Black & Hazen, 1990)でN, R児群において示唆されている場面に応じたスキル運用の欠如を示す結果が部分的にはあるが見い出されたといえる。

しかし、本研究にはいくつかの点で今後検討すべき問題が残されている。第1に、設定した観察カテゴリの中に、“発展的受諾”のように頻度が少なかったために分析に適さなかったカテゴリがあったことである。第2に、本研究では子どものコミュニケーション・スキルに関連した要因として社会的地位だけを検討しており、情緒の問題や認知的要因は考慮されていない。先行研究(佐藤・佐藤・相川・高山, 1990)では、引っ込み思案児の場合相手からの要求を断りたい場合でもうまく断ることができなかった可能性が指摘されている。このような点を明確にするためには幼児の対人関係に関する認知や遊びへの動機づけのような内面的要因をも考慮した上での検討が必要であろう。

参考文献

- Black, B., & Hazen, N. L. 1990 Social status and patterns of communication in acquainted and unacquainted preschool children. *Developmental Psychology*, **26**, 379-387.
- Coie, J. D., & Dodge, K. A. 1988 Multiple sources of data on social behavior and social status in the school: A cross-age comparison. *Child Development*, **59**, 976-985.
- Dodge, K. A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter (ED.), *Minnesota symposia on child psychology* (Vol. 18, pp. 75-127). Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum.
- Hazen, N. L., & Black, B. 1989 Preschool peer communication skills: The role of social status and interaction context. *Child Development*, **60**, 867-876.
- Hops, H. & Greenwood, C. 1988 Social skills deficits. In E. J. Mash & L. G. Tardal (Eds.), *Behavioral assessment of childhood disorders*. New York: The Guilford Press, 263-316.
- 姜 信善 1998 子どもの社会的地位とコミュニケーション・スキル—反応とフィードバックを中心に— 筑波大学発達臨床心理学研究 **9・10**, 45-53.
- Kemple, K., Speranza, H., & Hazen, N. 1992 Cohesive discourse and peer acceptance: Longitudinal relations in the preschool years. *Merrill-Palmer Quarterly*, **38**, 364-381.
- Mize, J., & Ladd, G. W. 1990 A cognitive-social learning approach to social skill training with low-status preschool children. *Developmental Psychology*, **26**, 388-397.
- 佐藤正二・佐藤容子・相川 充・高山 徹 1990 極端な引っ込み思案児の社会的適応と社会的スキル 宮崎大学教育学部紀要 教育科学, **68**, 1-8.

注

- (1) 但し、返答のカテゴリーの中“発展的な受諾”については頻度が少なく、分散が大きかったので分散分析を行わなかった。中央値以上と未満で分けて χ^2 検定を行った結果、度数に有意な偏りは示さなかった。

謝 辞

本論文をまとめるにあたり、ご指導頂きました筑波大学心理学系教授杉原一昭先生に、深く感謝致します。また、本研究にご協力いただきました幼稚園の諸先生ならびに園児の皆様に心より御礼申し上げます。